

大和合金

航空機向け販売急増

生産性改善に一層注力

特殊銅合金メーカーの大和合金(本社||東京都板橋区、萩野源次郎社長)は、航空機向けの販売が急速に伸びている。主に離着陸時の脚となるランディング

グギアのフッシュ(軸受)素材としてアルミ青銅や高力黄銅の棒・管を手掛けており、従来は改修用がほとんどだったが、この2年で新造機向けが大きく増

えた。航空機向けは今後も増加を見込んでおり、生産性改善に向けたプロジェクトもこのほど立ち上げた。航空機部品は非常に高い信頼性が求められる

ることから、素材の採用基準も厳しい。同社の銅合金素材は仏大手航空機部品メーカーがメキシコやシンガポールで行うオーバーホール用のフッシュ素材と

して認定され、徐々に数量を伸ばしてきた。さらに、2016年末に独航空機部品メーカーの新造機向けの採用が決まると、その納入本格化に伴い18年度(19年3月期)は航空機向け素材の販売量が前年比で倍以上に急増。過去10年間では10倍以上に増えた。

19年度も18年度実績を若干上回る見通し。また、仏メーカー向けはオーバーホールのほ

か新造機用でも採用が決まり、20年度以降の供給本格化が見込まれる。欧州での航空機関連ユーザーや、国際熱核融合実験炉プロジェクトへの納期調整などを強化するため、ポルトガルにこのほど支店を開設した。

萩野社長はさらなる販売増を見据え、生産性改善に一段と力を注ぐ方針を示す。航空機向け素材は品質の適合基準が厳しいため、現

状はほかの材料と比べ歩留まりが低い。このため事業として大きく成長したものの、収益性は満足する水準に達していない。

全社売り上げに占める比率は、17年度の51.6%から足元は十数%まで高まった。さらに比率が上がっていくことを想定すれば、その収益性改善は益々重要になってくる。9月には採算性改善プロジェクトを立ち上げた。

また、航空機向けの納期を3分の2の10週間に短縮する方針も打ち出している。萩野社長は、「生産や開発、外注まで含め、全体で毛づくろいの力を高めて

いきたい」と話す。20年夏ごろにはグループの三芳合金工業(本社||埼玉県入間郡三芳町)で同社初の大型鍛造プレスが稼働開始する予定で、これも生産性改善に寄与すると見込む。